
光

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光

【Nコード】

N8612A

【作者名】

スグル

【あらすじ】

その後の彼を知るものは居ない。

・・・・・・・・・・・・・・・・

朝の日差しが差し込む夏の森林。

ここは、東北地方の古い山道の道路。

過疎化が進んで、今では、誰も通らない。

標識は錆びている。

しかも、その先に小汚くて、誰も通らないトンネルがあった。

「待て、こら！ー！！」

「待てるか！ー！」

そんでもって、今、阿部健七というチンピラが、ヤクザに追いかけてられている。

そして、息を切らして逃げてる。

彼は中学時代、陸上部で良かったと思っていた。

とりあえず、追いかけてられる理由は語ると、長くなる・・・。

無職のせいで、ギャンブルに手を出し、ついには借金までした。

更には、通いのキャバクラのツケも返せないくらいに膨れ上がって、それで、痺れを切らしたヤクザが襲って来ている・・・。

彼の人生のテーマは、「なんとか、なるさ」

そんなんだから、こんな様に・・・。

ヤクザは、アパートの前で待ち伏せしてた。

おかげで、不気味な道路に走っていた。

「あそこに、いやがった！！阿部！！」

「やばい！！」

穴があつたら、入りたい一心で目の前に逃げ込んだ。

そうして、健七は迷わずトンネルに入っていた。
薄気味悪くて、真っ暗だった。
あと、冷気がきた。

「逃げ切れた!!」

しばらく走りこんだ健七は、そう言った。

健七は、逃げ切ったと喜んでいた。

「やっぱ、人生ってなんとかなるぜ!!」
そう心から思っていた。

だが、トンネルの出口が見えれば、見えるほど、
変な雑音が聞こえた。

「なんだ・・・」

彼は走るを止めてみた・・・。

だが、なにも聞こえなくなった。

「・・・」

急に、風の音がした。

妙に生ぬるい気持ちの悪い風であった。

シュッ!

「痛っ!!」

急に健七は、左の首筋を押さえた。

斬られたような激痛が走った。

血が出ている。

空気圧で生じる、かまいたちか?

傷口に触れた左手を見ると、血がべっとりだった。

「なんなんだよ!!」

着ていたTシャツにも血がついた。

もう一度、左の首筋に触れた。

「えっ・・・！」

傷が、塞がっていた。

血も流れていない。

痛くも無い。

「・・・」

傷が浅かったのか・・・？

もう血が手につかなくなった。

「うおっ！」

光が、目に入った。

トンネルの出口が見える。

そして、健七は、そのまま出口に向かって走って行った。

だが、彼は気づいていなかった。

血が出ていた首筋に、変な痣が出来ていたのに。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「大丈夫か、君？」

「っ！！」

健七は、いつの間にか、仰向けに倒れていた。

目の前には、警官がいた。

気絶していたようだ。

「・・・」

上体を起こして、左右見てみた。

追いかけてきたヤクザが、同じく気絶していた。

警官は、自転車に乗っていて一人だけ。

しかも、トンネルの出口に出たと思ったら、入って行ったトンネルの入り口に居た。

間違いはない。

トンネルの出口と入り口が同じってことはないし、目印らしき物もあつた。

「さつき、この近くを通つた住民から、人が倒れてると連絡があつて・・・」

と、警官から事情を聞いた。

なんで、トンネルの入り口に戻つた・・・。

そのことが、気になつて警官の説明が頭に入らなかつた。

このあと、ヤクザからドサクサに紛れて逃げる事が出来た。

だが、今ひとつ、スッキリしないでいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「はぁー」

アパートの部屋に着いた健七は、ため息をついた。

そして、ベッドに倒れこんだ。

逃げ回つて疲れたのと、借金をどうやって返して行くかであつた。

そう考えると、ため息が尽きない。

時間は、正午になつたばかりだったが、走つたせいで疲れて眠かつた。

ピンポーン！

プッシュホーンが鳴つた。

だが、健七は無視。

どうせ、今日の朝のように、また借金取りである。

ドアの鍵は閉めているので、居留守を使つていた。

別に借金取りでなくとも、健七は、誰とも会いたくなかつた。

だが、何度も何度もプッシュホーンを押していた。

「うるせえな・・・。俺は、居ないから帰れよ・・・」
と小声で愚痴った。

それでも、しつこく鳴っていた。

随分、今日は、ヤクザに縁があるなと思っていた。

ブッシュホーンが鳴り止んだ。

そして、急に静かになった。

「居なくなったのか・・・？」

と思って、健七はドアノブに這う様に近づいて行った。

まるで、ゴキブリのような動きであった。

よく事情があつて、この這うような動きは、よくやっていたのであった。

音を出さないように。

そして、静かに鍵穴に目を近づけた。

こうすると、ドアの向こうの景色が見える。

「・・・！」

ドアの向こうには、男が二人立っている。

一人は、長身のロンゲ。

もう一人は、アロハのサングラス。

というか、今日、健七を追いかけてきたヤクザの二人であった。

「またかよ・・・」

と、健七はため息をついた。

しかし、ドアノブに立っているヤクザ二人の様子がおかしかった。

どこか、小刻みに震えていた。

また健七は這う様に動いた。

誰だか解ったのだから、ドアノブに居る必要はない。

あと、この二人が消えるのを祈っているだけ。

そして、またベッドに着いた。

バン！！！！

急に大きな音がした。

「なんだ！」

ドアが、内側に倒れた。

外から蹴られて壊されたのだ。

ヤクザがキレて、ドアを蹴り倒したのか。

と思いつつ、健七は逃げ出そうと、窓側に走った。

それにしても、一言も発さないヤクザが不気味に感じていた。

「・・・」

「・・・」

ヤクザ二人は、無言でアパートの中に入っていた。

どこか、まるでロボットのようになり、ただ歩いているだけであった。

そして、二人は窓の方に眼を向けた。

窓が開いている。

この部屋は、一階なので窓から出て怪我などしない。

だから、健七は逃げられた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ブォン！！

アパートの住民の青年が、原付のエンジンを始動させた。

これで、バイトに向かうはずであった。

「おい、借りるぞ！！」

と言って窓から出て行った健七が、勝手に青年の体を払い除けて、バイクにまたがった。

「おい、こら！！これから、バイトなんだよ！！」

「あとで、返す!!」

と、言い放ちつつ健七はアクセルを握った。
すると、タイヤが回転しはじめる。

バイクは、もう持ち主の体から離れた。

「おいーーーー!!!」

青年は叫んだが、健七は構わず、バイクを走らせた。
さすがに、これならヤクザから逃げられる。

.....

バイクは、一層、加速した。

原付ではあるが、法定速度を無視してアクセルを握った。
見渡せば、景色は田舎らしく田んぼだけである。

この道は、朝、健七が走った道。

もう、このぐらいなら逃げ切っただろう振り返った。

「・・・」

足音が聞こえる。

走っているような足音。

道路を足で叩いているような音。

「嘘だろ・・・」

目を疑った。

バイクについて行けるはずがない。

じゃあ、何故だ・・・。

健七は、目を疑った。

ヤクザ二人が、後ろから走ってついて来ている。

しかも、息を切らさずに走っている。

なんで、バイクに・・・。

プロオオオオーン!!!!!!

健七は、アクセルを全開にしてバイクを走らせた。
不気味だった。

バイクに、走ってついてくるヤクザ二人が。
しかも、息を切らしていない。

無表情で。

なんでだと、疑問に思いつつも逃げた。
別の恐怖が、健七には沸いて来た。

バイクは、60キロは出ていた。

なのに、後ろに二人はミラーに映っている。

しかも、目の前には、朝、通ったトンネルが見えてきた。

別に、この方向に向かっていたわけでもなかったのに。

だが、今は、そのようなことを気にしている場合ではなかった。

「うおおおおお!!!!!!」

段々、ヤクザが迫ってきた。

こっちはバイクで走っていると言うのに。

気のせいかな、バイクが遅く感じる。

健七は、バイクのメーターを見て血の気が引いた。

ガソリンが尽きかけていたのだ。

アクセルを捻っても、もうバイクは加速しない。

キキイ!!

「くそ!!!!」

ついには、バイクを健七は乗り捨てた。

そして、自らの足で逃げ始めた。

バサッ！バサッ！！

羽根が羽ばたく音がした。
近くに鳥でもいるのか？

そういえば、足音が聞こえない。
健七は、振り返った。

「・・・！」

嘘だろ・・・。

夢だ・・・。

こんなこと、ありえない・・・。
頭がおかしくなりそうだった。

バイクを追いかけてくる時点で、おかしかった。
そして、仕舞いには、健七の目に映ってる状況となった。

「飛んでる・・・」

ヤクザ二人は、空中に飛んでいた。

二人して背中に、コウモリのような翼が生えている。
まるで、悪魔のように。

そして、羽根を羽ばたかせ健七に迫ってくる。

「うわあああああ！！！！！！！！！！」

健七は、必死で走った。

もはや、なんで逃げてるのかも、どうでも良かった。
自分の命の保証が無い。

それだけは、確かであった。

「ぐおおおお・・・」

「ぐおおおお・・・」

と、ヤクザは雄叫びを挙げる。

もはや、背中羽根といい、顔つきまで悪魔のようになっている。

二人の手は、鋭く爪が生え始めた。

まるで、肉食獣のような手に。

特撮のように、二人のヤクザの肉体が変化し始めた。

健七は、そのことに怯えた。

もはや、後ろからでも、二人が人間ではなくなってるのに解っている。

だからこそ、走った。

なぜ、こんな異常な事態になったのか。

考えてる余裕もなかった。

目の前には、例のトンネルが見えた。

そこに向かって、走るしかない。

逃げる場所を選択する余地もなかった。

「畜生！！！！」

そう言葉を吐いた。

あのトンネルが、原因なのか。

ヤクザ二人を変えたのは。

翼が生えて、肉食獣みたいにヨダレを垂らしてやがる。

人間じゃない。

そいつが、後ろから襲ってくる。

「だあああああ！！！！！！」

健七は腹の底から、恐怖で支配されそうだった。

だから、思い切り叫んだ。
そして、自分の体がまたトンネルに入った。

「ぐおおお・・・」

まだ聞こえてくる。

よだれを垂らしている。

トンネルの中は、真つ暗だ。

そんな状況で、後ろに引っ付いてくる化け物から逃げている。

走っても、走っても、恐怖が消えない。

健七は首筋から、生暖かい物を感じた。

「いでえ・・・」

走りながら、左首筋を触った。

血がべつとりだ。

なんで、また血が。

そんなことよりも、後ろの化け物が・・・。

急に、光が見えた。

トンネルの先から。

もうすぐ出られる。

だが、後ろには・・・。

どうしようもない絶望が、健七を襲った。

徐々に、光は増してゆく。

「眩しい・・・」

太陽の光ではない。

なんか、光の感じが違う。

ライトの光でもない。

自然の光でも人工的な光ではないと、健七は思った。

その光に、健七は照らされた。

気のせいか、恐怖が消えてゆく。

「なんだよ、この光の感じ・・・」

眩しいけど、心地よかった。

不思議な光である。

そのせいで、走るのをやめた。

うしろからは、化け物が迫っている。

しかし・・・。

「ぎゃあああああ！！！！」

「うああああああ！！！！」

後ろの化け物が騒ぎ始めた。

肉食獣のような叫びだが、苦しんでいる。

やつらも、光に包み込まれてる。

そのせいか、苦しんでいるのは。

健七は、振り返ってみた。

化け物が近づいてこない。

奴らの翼が縮んでる。

爪が短くなっている。

徐々に、姿に人間に戻っている。

光を浴びたせいか。

そして、化け物の動きが止まった。

人間に戻っている。

異形の姿だったのに、服装までもが元に戻っていた。

そして、二人のヤクザは気絶して倒れこんでいる。

「はあはあ・・・」

いつのまにか、光は消えている。

そして、呼吸が激しく乱れている。

頭が、まだ錯乱している。

だが、助かったようだ。

それは、解る。

健七は、汗で濡れた手で首筋を触った。

血は出ていない。

「なんだって・・・、言っただよ・・・」

そして、首筋に触れた自分の左手を見た。

「!？」

左手が、異常だ。

ゴツゴツとした手で、自分の手ではないようだ。

爪が虎のようになってる。

まるで、金剛力士像の手のよう。

右手は、普通だ。

左手だけが、変化している。

「なんなんだよ!!!」

その左手を見つめ続けながら、トンネルの中で腰をついた。
足が震えている。

もしかして、自分もこのヤクザのような化け物に・・・。

そう考えると、健七の意識が擦れて来た。

トンネルの暗闇が、また増してきた。

その暗闇に飲み込まれてゆくように、健七の視界は消えた。

意識も無くなっていた。

より暗闇は、健七を飲み込んでゆく。

夜になり、その暗闇は辺りに肥大化してゆく。

その後の阿部健七を知るものは居ない。

知っているのは、あのトンネルの暗闇だけであった。

(後書き)

初の短編です。

読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8612a/>

光

2011年10月3日08時20分発行